山口県埋蔵文化財センター調査報告 第5集

岡田（おかだ）・江良（えら）遺跡

－平成9年度山口北部農地整備事業に伴う発掘調査報告－

1998

財団法人　山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

中扉写真：　青磁鎬蓮弁文碗（ＳＴ２出土）

堀から熊山城跡を望む

例　　言

1．本書は山口北部農地整備事業に先だって平成９年度に実施した岡田・江良遺跡（山口県阿武郡むつみ村大字吉部上）の発掘調査概要報告書である。

2．本書は、財団法人山口県教育財団が中国四国農政局山口北部農地整備事業所の委託と文化庁国庫補助を得て実施した調査の成果を報告するものである。

3．調査組織は次の通りである。

調査主体　財団法人山口県教育財団
　　山口県埋蔵文化財センター
調査担当　財団法人山口県教育財団
　　山口県埋蔵文化財センター指導主事　　西田　宏
　　同　　椙山　茂樹
　　山口県埋蔵文化財センター主任　　村岡　和雄

4．調査に当たっては、中国四国農政局山口北部農地整備事業所、むつみ村施設課、むつみ村教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5．本書の第１図は、国土地理院発行５万分の１地形図「徳佐中」を使用、第２図は中国四国農政局山口北部農地整備事業所提供、第36図はむつみ村施設課提供のものである。

6．本書が使用した方位は、国土座標（第３座標系）で示し、標高は海抜標高である。

7．出土遺物のうち石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門学芸員　亀谷　敦　氏に指導をいただいた。なお石質鑑定は表面観察によるものである。

8．本書に使用した土色の色調の表記は、Munsell方式による。農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」による。

9．図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10．本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
　ＳＢ：住居跡、建物跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：柱穴

11．本書の実測図・写真の作成及び本文の執筆・編集は、西田・椙山が共同で行った。

目　　次

1　遺跡の位置と環境 ……1

2　調査の経緯と概要 ……3

3　Ⅰ地区の遺構と遺物 ……11
　(1)建物跡 ……11
　(2)土坑 ……15
　(3)埋葬遺構 ……16
　(4)柱穴 ……18

4　Ⅱ地区の遺構と遺物 ……19
　(1)建物跡 ……19
　(2)土坑 ……21
　(3)埋葬遺構 ……22

5　Ⅲ地区の遺構と遺物 ……23
　(1)土坑 ……23
　(2)遺構に伴わない遺物 ……24
　(3)堀 ……24

6　まとめ ……32

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……1
第２図　調査区設定図 ……4
第３図　Ⅰ地区遺構配置図……5・6
第４図　Ⅱ地区遺構配置図……7・8
第５図　Ⅲ地区遺構配置図 ……9・10
第６図　ＳＢ１実測図……11
第７図　ＳＢ２・３・４・５実測図……12
第８図　ＳＢ６・７実測図……13
第９図　ＳＢ８・９・10実測図……14
第10図　ＳＫ２・４実測図……15
第11図　ＳＫ５・６実測図……16
第12図　ＳＫ４・５出土遺物実測図……16
第13図　ＳＴ１・２・３実測図……17
第14図　ＳＴ1･2･3出土遺物実測図 ……18
第15図　ＳＰ216・237実測図……18
第16図　Ⅰ地区柱穴出土遺物実測図……18
第17図　ＳＢ11実測図……19
第18図　ＳＢ12・13実測図……20
第19図　ＳＫ11・12実測図……21
第20図　ＳＫ11出土遺物実測図……22
第21図　ＳＫ12出土遺物実測図……22
第22図　ＳＴ４実測図……22
第23図　ＳＴ４出土遺物実測図……22
第24図　ＳＫ15実測図……23
第25図　ＳＫ18・19実測図……24
第26図　ＳＫ15・18・19出土遺物実測図……25
第27図　遺構に伴わない遺物実測図……25
第28図　堀とトレンチの位置……25
第29図　堀実測図……26
第30図　堀断面図①……27
第31図　堀断面図②……27
第32図　堀出土遺物実測図①……28
第33図　堀出土遺物実測図②……29
第34図　堀出土遺物実測図③……30
第35図　堀出土遺物実測図④……31
第36図　岡田・江良遺跡周辺地形図……33

図版目次

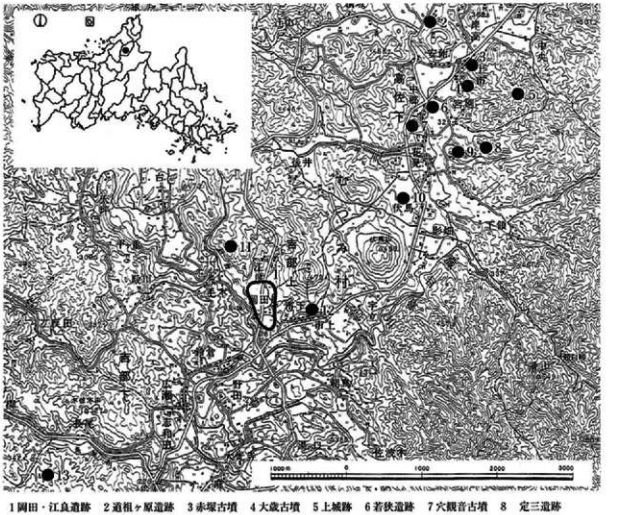
巻頭図版①　青磁鎬蓮弁文碗(ST2出土)
巻頭図版②　堀から熊山城跡を望む
図版１　岡田･江良遺跡遠景　第Ⅰ地区全景
図版２　第Ⅱ地区全景　第Ⅲ地区全景
図版３　第Ⅲ地区堀全景　第Ⅲ地区堀と権現山を望む
図版４　堀完掘
図版５　堀の柱穴列　堀北端柱穴列　堀中央部柱穴列　堀西側柱穴列
図版６　堀土層断面A・E・H・I
図版７　堀土層断面J　SK4･5･11出土状況　SK2･4･5完掘
図版８　SK11･12･15出土状況　SK11･12･15完掘
図版９　ST2･3出土状況　SK18･19･ST1･2完掘
図版10　ST4･SP216･237出土状況　ST3･4･SP216･237完掘
図版11　SB2　SB3　SB4　SB5
図版12　SB6　SB7　SB11　SB12･13
図版13　Ⅰ地区SK出土遺物　ST出土遺物　SP出土遺物
図版14　Ⅱ地区SK11出土遺物　Ⅱ地区SK12出土遺物
図版15　Ⅱ地区ST4出土遺物　Ⅲ地区SK･包含層内出土遺物
図版16　Ⅲ地区堀出土遺物①
図版17　Ⅲ地区堀出土遺物②
図版18　Ⅲ地区堀出土遺物③

1　遺跡の位置と環境

岡田・江良遺跡の地理的環境

岡田・江良遺跡は、阿武郡むつみ村吉部上に所在する。むつみ村は、山口県の北部に位置し、阿武郡のほぼ中央にあたる山間の村である。中国山地は本県にはいると、数支に分岐し、次第に高度を下げる。その支脈の一つが飛石山（705m）を主峰とする山塊で、北東より南西方向にかけて、滑山（649m）、大将山（644m）と連なり、むつみ村の南東側、阿東町との境界となっている。むつみ村北辺の須佐・阿武両町との境界付近も、東台（541m）、菅谷山（626m）など500m級の山が南西方向に走っている。この両高地帯に挟まれた片俣・高佐・吉部の低地もまた、北西から南西方向に並んでおり、むつみ村の大部分がこれらの低地を南西に下る蔵目喜川（阿武川の支流）の流域となっている。これらの低地は、蔵目喜川の谷底平野と河岸段丘及び溶岩流段丘として形成されたもので、むつみ村の中心産業である農業がここで営まれている。栽培されているものは水稲が多いが、水田転作作物としてトマト・メロン・スイートコーンなども作られるようになってきている。溶岩性の台地では、肉牛の飼育やたばこ・大根などの栽培も盛んである。

本遺跡は、むつみ村の南西部に位置する吉部低地の北東の端、権現（牟礼）山から南西に広がる丘



1 岡田・江良遺跡　2 道祖ヶ原遺跡　3 赤塚古墳　4 大歳古墳　5 上城跡　6 若狭遺跡　7 穴観音古墳　8　定三遺跡
9 下城跡　10 前尻ヶ原遺跡　11 熊山城跡　12 奥阿武宰判勘場跡　13 長尾山たたら製鉄遺跡

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

陵上にある。比較的緩やかな傾斜ではあるが、北東に向かうほど傾斜はきつくなる。現在は調査区のすべてが水田として利用されているが、近くの河川との高度差が大きく、山水の利用にも限界があると考えられるので、水田耕作が本格的に可能となったのは、近世（安政6年，1859）に堤を備えてからのことと推測される。事実、古地図などにより、調査区の中に近代まで畑として利用されていた部分がかなりあったことが確認されている。地質的には、丘陵斜面に接した低地に分布する黄褐色水田土壌で覆われており、作土下50cmの平均土性は粘質である。

岡田・江良遺跡の歴史的環境

村内の縄文遺跡として道祖ヶ原遺跡がある。この遺跡は、山間にある一般的な縄文遺跡のように、散在的で、規模も小さく、遺物の量も少ない。移動生活の中におけるキャンプサイトの一つであると考えられる。小国・若狭・前尻ヶ原など弥生時代の集落遺跡は、水田耕作の適地として蔵目喜川沿いの肥沃な土壌を利用したもので、片俣・高佐低地の開発の古さを物語っている。古墳時代後期に築造された穴観音古墳は、県下では数少ない方墳であり、両袖式の横穴式石室を持つ。この古墳の出現は、農耕生産者集団を統治する支配者の出現を裏付けている。律令時代に至り、高佐・吉部は長門国阿武郡宅佐郷に所属し、厚狭で山陽道から分かれ、現在の萩を通って島根に抜ける山陰ルートの駅家（宅佐駅）が置かれた地として発展した。

岡田・江良遺跡には、中世（鎌倉・室町時代が中心）の人々の生活の痕跡が残されている。その頃、この地域はどのような歴史の中にあったのであろうか。この地域は鎌倉時代長門守護の支配下に置かれたが、この時代の終わり頃には各地に小豪族が存在し、勢力を掘っていたようである。室町時代に入ると、戦国時代に西国随一の勢力を誇る大内氏がこの地を支配するようになる。応仁の乱の時期、この大内氏が反乱を起こした大内教幸と津和野の吉見氏の連合軍と戦い、これを破ったのが現在のむつみ村を中心とする阿武郡内である。（教幸は高佐の上城・下城を居城とし、大内方の陶氏は大将山に陣をかまえた。）ここより、山陰地方と当時西の京とも呼ばれた山口を結ぶ、大切なルート上にこの地域があったことが推測できる。

岡田・江良の周辺には、このころから残るものがいくつかある。まずは、調査区の東に位置し、県指定天然記念物の大スギで知られる吉部八幡宮である。この八幡宮は、12C末つまり鎌倉幕府成立の頃、ここに移されてきたと伝えられている。北西の茶臼山には、中世の山城である熊山城跡があり、当時この地域が戦略上重要な場所であったということ、そして地域を治める領主が存在した可能性を感じさせる。

江戸時代には、萩藩の地方行政区域18宰判の一つである奥阿武宰判の勘場（代官所）が、吉部市に設置され、現在の阿武郡東部地域の中心地となり、人家も増加した。

むつみ村教育委員会　『むつみ村史』1985年

むつみ村教育委員会　『奥阿武宰判勘場跡遺跡』1995年

山口県教育委員会　未指定文化財総合調査報告書（史跡・中世・編）1985年

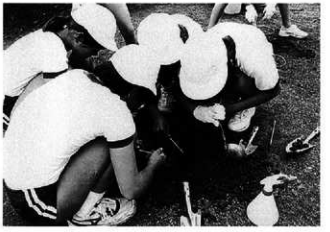
山口県　大規模林業開発地域土地分類基本調査　他佐中・津和野　1977年

2　調査の経緯と概要

岡田・江良遺跡のある岡田地区・江良地区一帯は山口北部農地整備事業の対象になっており、事業を施行するにあたり圃平が工法上避けられない範囲について埋蔵文化財の埋存が予想されるため当該地域の水田について予察調査を行い、この結果を踏まえて山口県教育委員会では中国四国農政局山口北部農地整備事業所と協議を行い発掘調査の対象となる範囲を設定した。調査にあったっては財団法人山口県教育財団が中国四国農政局山口北部農地整備事業所から委託を受けて行うこととなった。

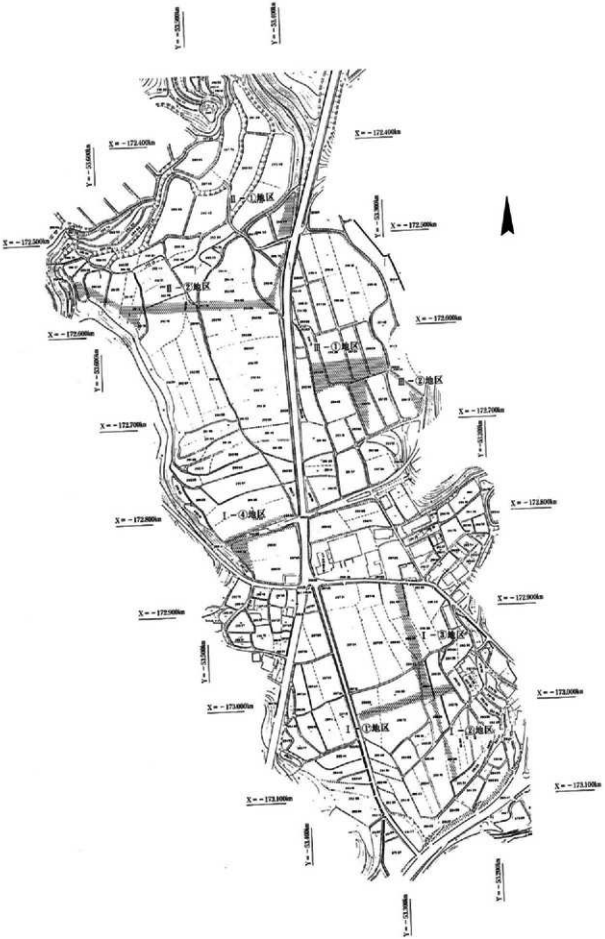
平成９年５月６日から調査を開始した。まず重機を使って遺構面直上まで表土除去を行った。Ⅲ地区の表土除去中に、白磁碗を発見するハプニングもあった。表土除去作業が終了した調査区について、本遺跡の南側にあるⅠ地区からⅢ地区・Ⅱ地区の順に遺構検出作業を進めていった。Ⅲ地区では武士の館の堀と思われる遺構を検出した。遺構検出作業終了後、Ⅰ地区の掘り込み作業を行った。各遺構の状況に応じて選択して発掘するとともに写真・図面等によって記録し、出土した青磁碗・土師器・瓦質土器等の遺物を収集した。８月６日、Ⅰ地区の調査を終了し、遺跡の北東側にあるⅢ地区の堀の掘り込み作業を開始した。堀は東西が約60m、堀幅は上端で２～５m、深さは最大1.2mと大規模なもので、完掘までに１ヶ月を要した。大変な作業の毎日であったが、出土した多量の土器や石製品を収集することができた。堀の完掘後、Ⅲ地区のその他遺構の掘り込み作業及びⅡ地区の掘り込み作業を行った。９月12日、Ⅱ地区・Ⅲ地区の掘り込み作業を終え、遺構面の清掃をした後、９月18日、空中撮影用のヘリコプターで遺跡の空中撮影を行った。その後、残った遺構の写真撮影・実測を進めた。発掘調査の結果については、その概要について現地説明会を行った。調査期間中、吉部小学校・高俣小学校の児童やむつみ中学校の生徒が遺跡見学や発掘体験学習に参加するなど、岡田・江良遺跡を地域の教育の場として利用していただいた。また、調査期間中に地震・大洪水・台風と災害が続き復旧活動等で大変な中、作業員の方には発掘調査に快く参加していただいた。平成９年９月30日、作業員の方々をはじめ関係各位の多大な援助・協力によりすべての発掘調査を終了した。

堀の掘り込み作業



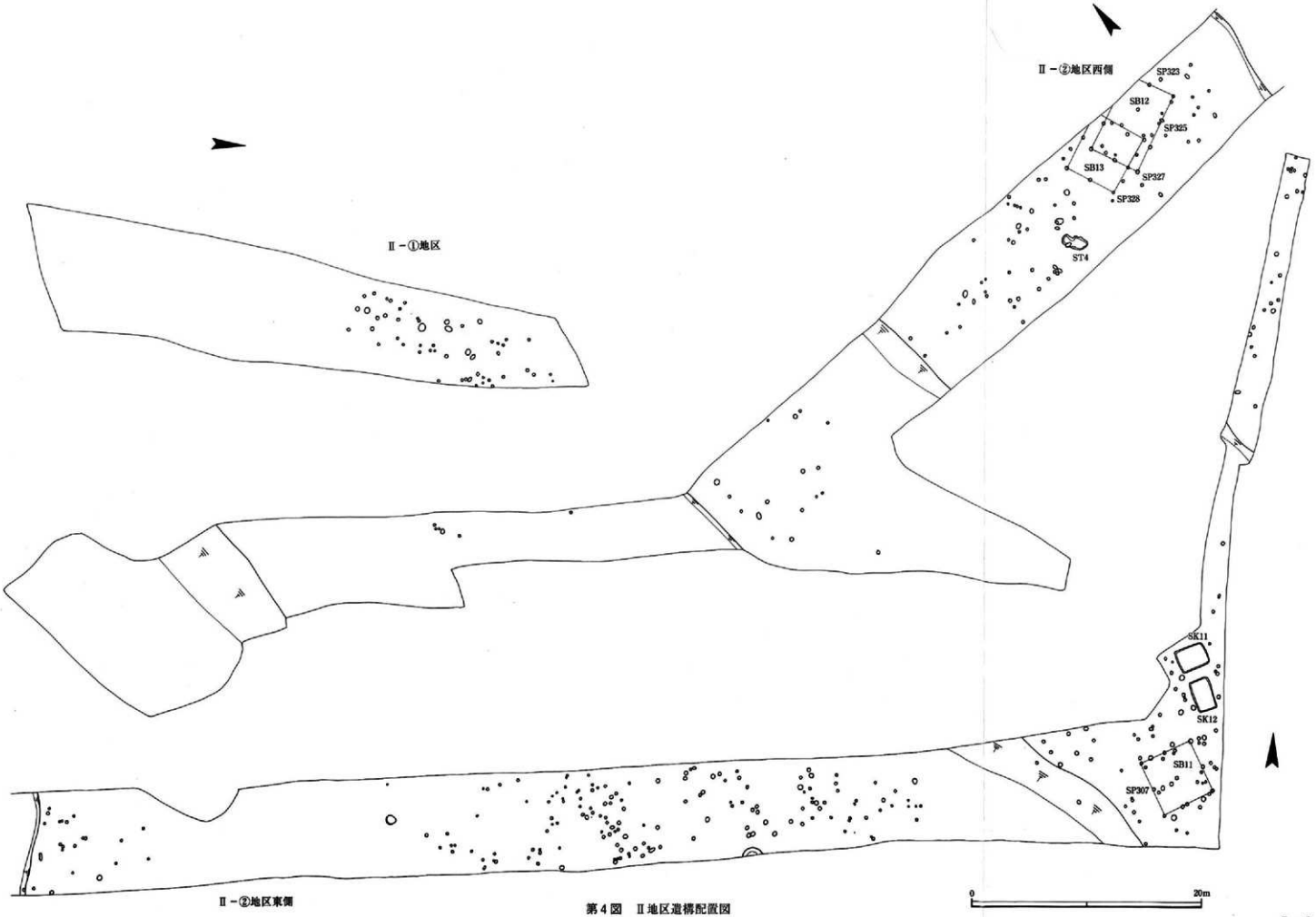
体験学習

出土遺物は、復元・実測を山口県埋蔵文化財センターにおいて行い、また調査資料を整理して、この報告書を刊行した。

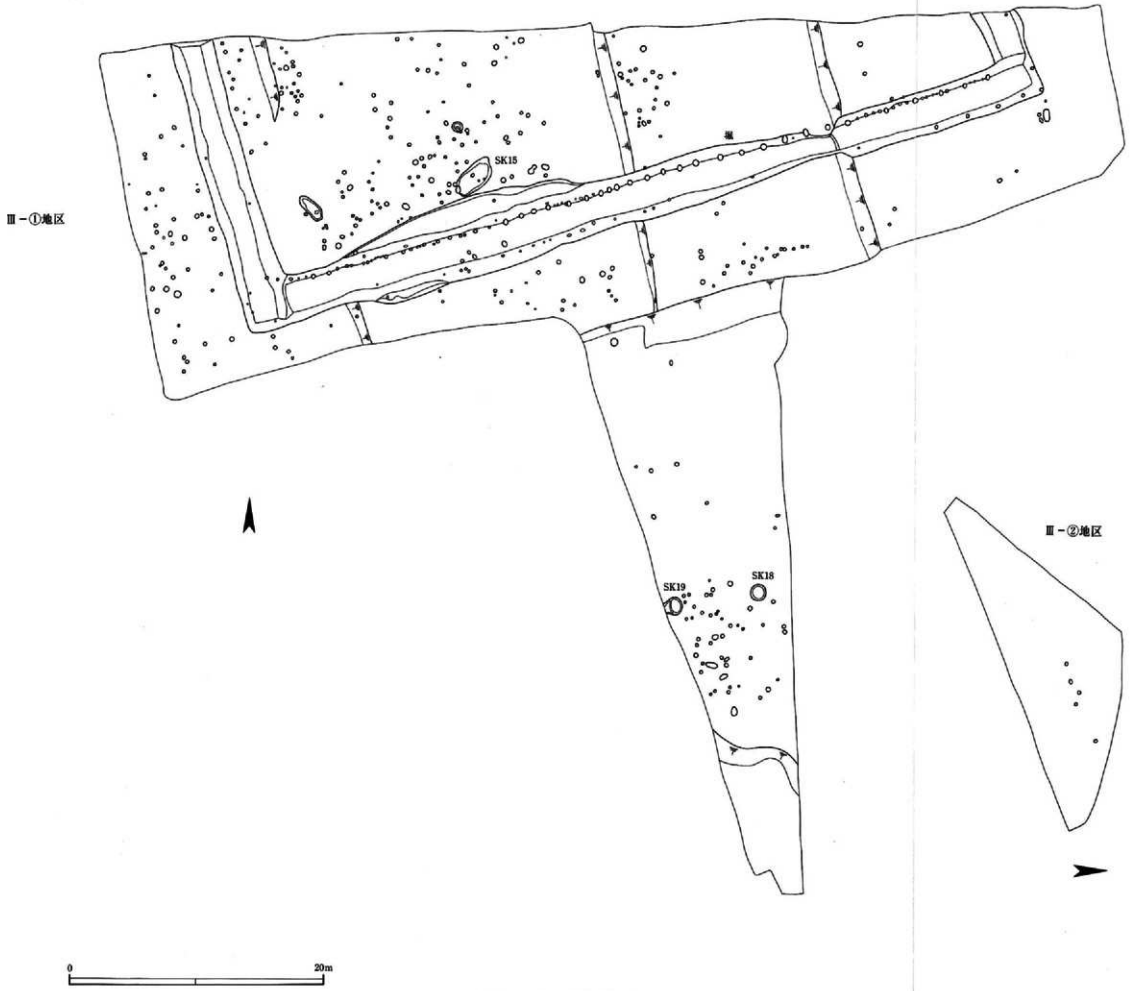


第２図　調査区設定図（４千分の１）

第3図　Ⅰ地区遺構配置図



第４図　Ⅱ地区遺構配置図



第５図　Ⅲ地区遺構配置図

3　Ⅰ地区の遺構と遺物

Ⅰ地区は、岡田・江良遺跡の南側に位置し、遺跡北東部にある権現山から西及び南方向に延びる丘陵の南端付近にある。Ⅰ地区は、南側の地区をⅠ－①地区・Ⅰ－②地区・Ⅰ－③地区、北西側の地区をⅠ－④地区とした。標高は284m～286mでほぼ平坦である。遺構面は黄褐色土で、所々で火山からの噴出物と思われる黒褐色土の堆積が見られる。また、Ⅰ－①地区・Ⅰ－②地区では所々で20～40cmの礫（玄武岩）が露出している。また、後世の削平を受けており、Ⅰ地区の遺構は浅いものが多い。Ⅰ地区で発見された遺構は、中世の掘立柱建物跡と思われるもの10棟、土坑10基、中世の埋葬遺構と思われるもの３基、柱穴約1720個である。遺物については、中世の土師器及び瓦質土器が大半を占めるが、輸入青磁碗（12世紀）や木棺墓で使用されたと思われる鉄釘などの遺物も出土した。

以下に、Ⅰ地区の主要な遺構と遺物を紹介する。

（１）　建物跡

掘立柱建物跡は、Ⅰ地区において10棟確認された。その多くは、１間×２間の規模であるが、１間×３間、２間×３間の建物もある。また、棟方向は、若干のふれはあるがほぼ東西方向を向くものと南北方向を向くものとに大別できる。柱穴の埋土・配置・出土遺物及び周辺遺構からの出土遺物との比較などからいずれの建物も中世の掘立柱建物と考えられる。

ＳＢ１　（第６図）

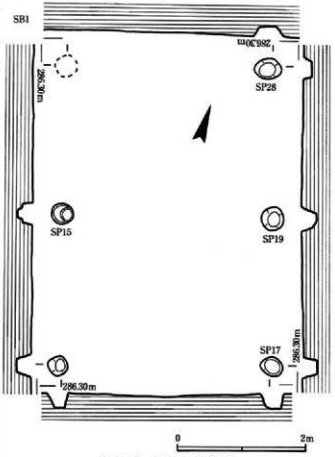
Ⅰ－①地区の西側の位置に建てられた掘立柱建物。建物の北側梁の柱穴１個が確認できなかったが１間×２間の掘立柱建物と思われる。棟方向はＮ16°Ｗ。桁行長4.6m、梁行長3.1mの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は直径30～35cm、深さ15～24cmである。ＳＰ15・17・19・28から土師器片、ＳＰ28から木炭の細片が出土した。

ＳＢ２　（第７図　図版11）

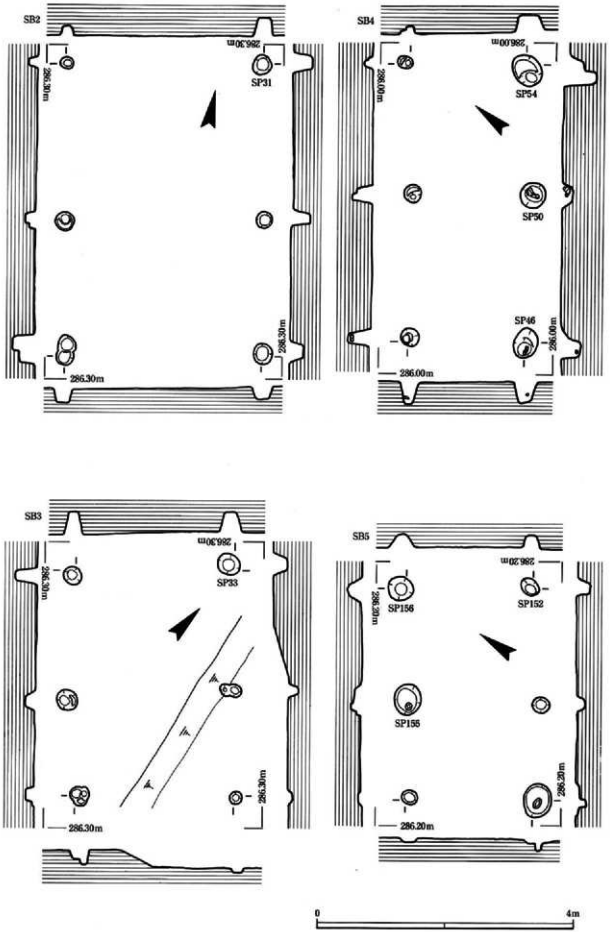
Ⅰ－①地区の中央部に建てられた１間×２間の掘立柱建物。棟方向はＮ15°Ｗ、桁行長4.6m、梁行長3.1mの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は、直径18～30cm、深さ14～29cmである。ＳＰ31から土師器片と木炭の細片が出土した。

ＳＢ３　（第７図　図版11）

Ⅰ－①地区の東側に建てられた１間×２間の掘立柱建物。棟方向はＮ33°Ｗ。桁行長3.5m、梁行長2.4mの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は直径20～35cm、深



第６図　ＳＢ１実測図



第7図　SB2・3・4・5実測図

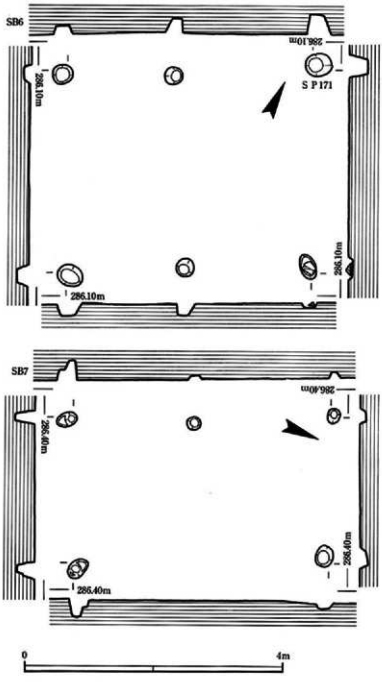
さ8～34cmである。建物の南東側は後世の削平を受け柱穴は極端に浅くなっている。ＳＰ33から土師器片と木炭の細片が出土した。

ＳＢ４　（第７図　図版11）

Ⅰ－①地区の東側に建てられた１間×２間の掘立柱建物。棟方向はＮ55°Ｅ。桁行長4.3m、梁行長1.8mの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は直径20～45cm、深さ11～50cmである。ＳＰ46・50から土師器片と木炭の細片、ＳＰ54から土師器片が出土した。

ＳＢ５　（第７図　図版11）

Ⅰ－③地区の南端に建てられた１間×２間の掘立柱建物。棟方向はＮ63°Ｅ。桁行長3.3m、梁行長２mの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は直径22～48cm、深さ６～22cmである。ＳＰ152・155・156から土師器片が出土した。



第８図　SB6・7実測図

ＳＢ６　（第８図　図版12）

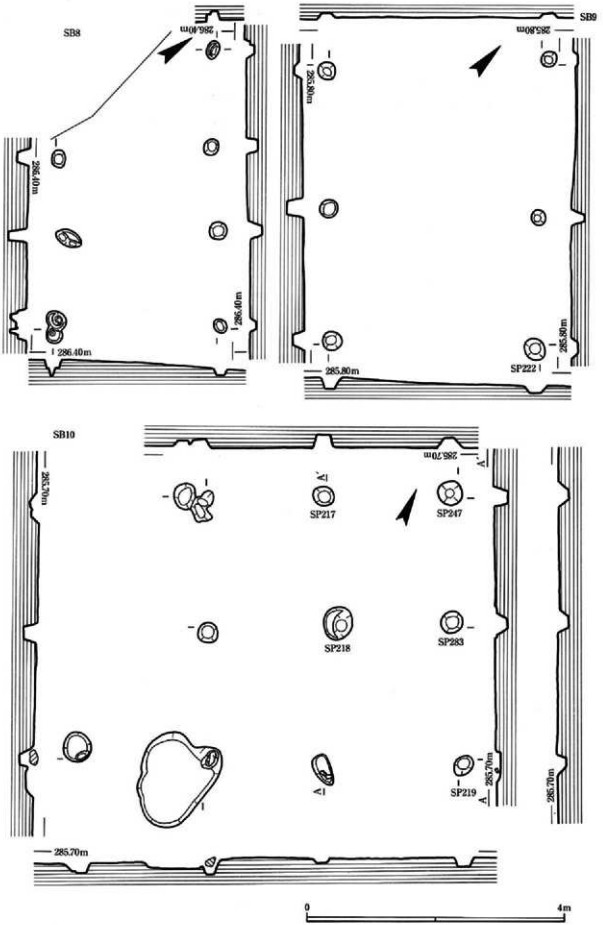
Ⅰ－③地区の南側に建てられた１間×２間の掘立柱建物。ＳＢ５に隣接する。棟方向はＮ63°Ｅ。桁行長3.8m、梁行長3.1mの規模をもち、６本の柱で構成されている。ＳＰ171から土師器片が出土した。

ＳＢ７　（第８図　図版12）

Ⅰ－③地区の南側に建てられた１間×２間の掘立柱建物。棟方向はＮ23°Ｗ。桁行長４m、梁行長2.3mの規模をもち、東側桁の柱穴１個がないが、６本の柱で構成されていたと考えられる。柱穴は直径18～32cm、深さ10～28cmである。柱穴からの遺物はなかった。

ＳＢ８　（第９図）

Ⅰ－③地区の中央部に建てられた１間×３間の掘立柱建物。西側の柱穴１個が調査区外のため確認できなかった。棟方向はＮ54°Ｗ。桁行長4.4m、梁行長2.5mの規模をもち、８本の柱で構成されていたと考えられる。柱穴は直径20～28cm、深さ10～26cmである。柱穴からの遺物の出土



第9図　SB8・9・10実測図

はなかった。

ＳＢ９　（第９図）

Ｉ－③地区の中央部に建てられた１間×２間の掘立柱建物。棟方向はＮ44°Ｗ。桁行長4.4ｍ、梁行長3.3ｍの規模をもち、６本の柱で構成されている。柱穴は直径23～34cm、深さ６～20cmである。遺物の出土はＳＰ222からの木炭の細片のみである。

ＳＢ10　（第９図）

Ｉ－③地区の北側に建てられた２間×２間の総柱建物である。しかし、西側梁方向に調査区の畦畔が迫っているため確認できなかったが、残存する柱穴の配置から２間×３間の建物の可能性もある。棟方向はＮ25°Ｗ。桁行長４ｍ、梁行長3.9ｍの規模をもつ。柱穴は直径30～50cm、深さ９～27ccmである。ＳＰ217から土師器皿、土師器坏（第16図）、ＳＰ218から瓦質土器すり鉢（第16図）・土師器片、ＳＰ219から土師器皿（第16図）、ＳＰ247・283から土師器片が出土した。14～15世紀に比定できる。

（２）　土坑

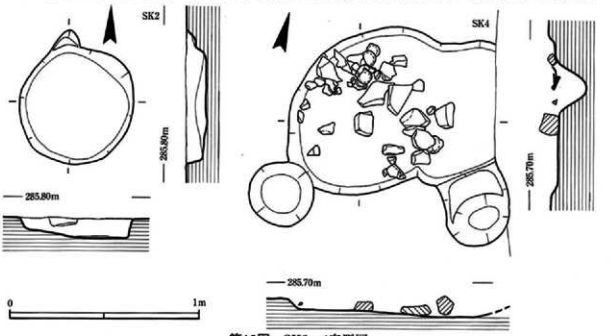
Ｉ地区の土坑の大半は、後世の削平を受け、底面部がわずかに残っているだけであり、大半は時期や用途について不明である。また、この地区の土坑から出土した遺物は、図化困難な破片が大半であり、図化できたのはＳＫ４から出土した土師器皿１点、土師器坏２点、土師器鍋片１点、青磁碗片１点及びＳＫ５から出土した土師器皿３点、土師器坏１点である。

ＳＫ２　（第10図　図版７）

Ｉ－②地区北側に位置する。長径6.5ｍ、短径6.0ｍ、深さ0.1ｍのほぼ円形の土坑である。埋土は黒褐色の単層であり、骨片と土師器片が出土した。骨片は火を受けて細片となっており、人骨・獣骨の判別及び部位の同定はできなかった。骨片が無秩序に埋土中に混在することから、墓の可能性は低いと考えられる。中世の遺構である。

ＳＫ４　（第10図　図版７）

Ｉ－③地区の中央部東寄りに位置する。長軸1.1ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.2ｍの不整長円形の土坑であ



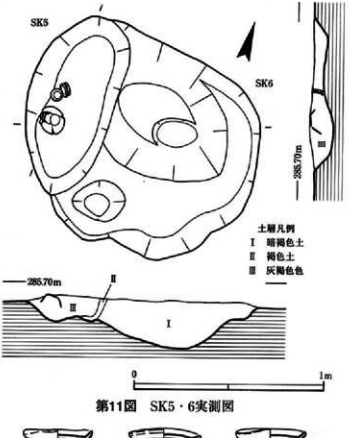
第10図　SK2・4実測図

る。土坑東側は、調査区畦畔により切られる。また、底面中央部には小坑が掘り込まれる。底面に接する状態で10～15mの自然石の角礫が出土した。埋土は黒褐色土（木炭細片混入）の単層であり、角礫とともに土師器坏・皿・鍋（第12図１・５・６・８）と青磁碗の底部（第12図９）が出土した。14世紀の遺構と考えられる。

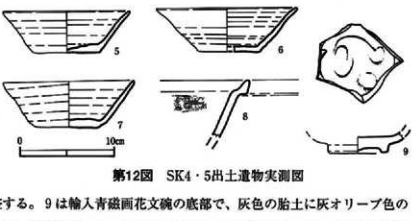
ＳＫ５　（第11図　図版７）

Ｉ－③地区の中央部北寄りに位置する。長軸1.0m、短軸0.4m、深さ0.15mの長円形の土坑で、ＳＫ６を切っている。埋土は褐色土の単層であり、土師器坏・皿（第12図２～４・７）が出土した。14世紀の遺構と考えられる。

土坑出土の遺物で図化可能なものは、ＳＫ４・５の土器及び磁器である。



第11図　SK5・6実測図



第12図　SK4・5出土遺物実測図

第12図１・５・６・８・９はＳＫ４出土の遺物である。１は土師器皿である。底部外面には回転糸切りの痕跡を残す。５・６は土師器坏である。それぞれ底部は、回転糸切りされている。８は土師器鍋である。内面はハケによって調整する。９は輸入青磁画花文碗の底部で、灰色の胎土に灰オリーブ色の釉を施釉。見込みに画花文を施文。第12図２～４・７はＳＫ５出土の遺物である。２～４は土師器皿である。底部には回転糸切りの痕跡を残す。７は土師器坏である。底部に回転糸切りの痕跡を残す。

（３）　埋葬遺構

Ｉ地区では、３基の墓を検出した。いずれの墓も後世の削平により浅いが、出土遺物から中世の墓と考えられる。

ＳＴ１・２　（第13図　図版９）

ＳＴ１は長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.06mの隅丸長方形の墓坑をもつ墓であり、Ｉ－①地区の中央部に位置する。鉄釘（第14図14）の出土から木棺墓と判断した。墓坑はほぼ南北に主軸をとり、北側でやや幅を増す。この墓からは鉄釘以外の遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

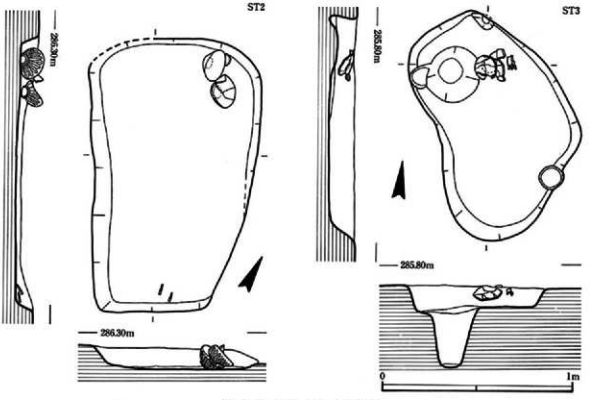
ＳＴ２はＩ－③地区南側やや西寄りに位置する。長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.10mの隅丸長方形の

墓坑をもつ墓であり、鉄釘の出土から木棺墓と判断した。また、後世の削平を受け底面がわずかに残存するだけで、墓坑の東側は消滅している。埋土中から出土した鉄釘は南側短辺付近で発見した。北側の墓坑底面に接して土師器皿２点と輸入青磁碗２点が重なるかたちで出土した。出土した遺物から、13世紀の遺構と考えられる。

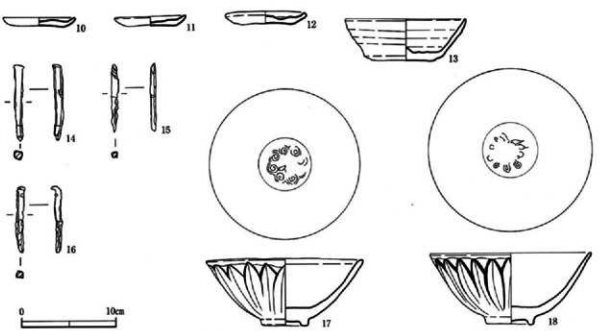
ＳＴ３　（第13図　図版９・10）

Ｉ－②地区北側に位置する、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.14mの不整長円形の墓坑をもつ墓である。墓坑はほぼ南北に主軸をとり、墓坑底面北東側及び北側に小坑が掘り込まれており、墓坑南東側は、後代の柱穴によって切られる。鉄釘・木質等が出土しないことから、土坑墓と判断される。埋土中から骨片の細片が出土したが部位の同定はできなかった。また、墓坑の北側から出土した土師器皿１点・土師器坏１点から14世紀の遺構と考えられる。

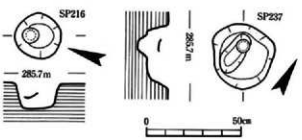
第14図にはＳＴ１・２・３の出土遺物を掲載した。14はＳＴ１、15・16はＳＴ２出土の鉄釘である。10～12は土師器皿であり、いずれも底部には回転糸切りの痕跡を残す。10・11はＳＴ２、12はＳＴ３から出土した。13はＳＴ３から出土の土師器坏である。底部には回転糸切りの痕跡がある。17・18はＳＴ２から出土した青磁碗である。17・18は輸入青磁鎬蓮弁文碗で、い



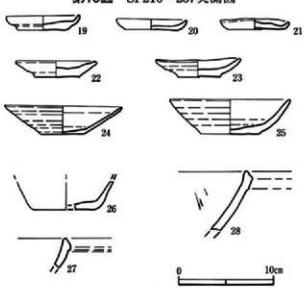
第13図　ST1・2・3実測図



第14図　ST1・2・3出土遺物実測図



第15図　SP216・237実測図



第16図　Ⅰ地区柱穴出土遺物実測図

ずれも見込みに印花文が見られる。内外ともに釉薬を施し、明緑灰色を呈する。

（4）　柱穴

Ⅰ地区では約1720個の柱穴が発見された。大半のものは、本来掘立柱建物を構成していたと考えられるが、建物として復元されたものは、わずかであった。ここでは、遺物の出土状況に特徴のあるものを紹介する。なお、柱穴として紹介するこれらの遺構は地鎮祭等のような祭祀に伴う遺構である可能性もある。

ＳＰ216　（第15図　図版10）

長径0.24m、短径0.18m、深さ0.14mのほぼ円形の柱穴である。埋土は暗褐色土の単層であり、土師器皿（第16図22）１点が出土した。

ＳＰ237　（第15図　図版10）

長径0.35m、短径0.31m、深さ0.17m不整円形の柱穴である。埋土は暗褐色土の単層であり、土師器皿１点（第16図21）が出土した。

第16図は柱穴出土遺物である。ここでは、図化可能な遺物について紹介する。19～23は土師器皿である。底部に回転糸切りの痕跡を残す。19はＳＰ12、20はＳＰ219、21はＳＰ237、22はＳＰ216、23はＳＰ227から出土した。24はＳＰ200から、25はＳＰ228、26はＳＰ217から出土した土師器坏である。27は白磁玉縁碗の口縁部、28はＳＰ218出土の土師器すり鉢片である。

4　Ⅱ地区の遺構と遺物

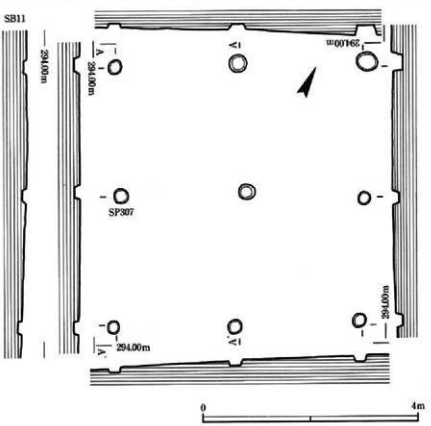
Ⅱ地区は、本遺跡の北西側にあり、権現山より西方に延びた丘陵の西端付近に位置している。Ⅱ地区の西側は、南流する蔵目喜川の支流である惣津川に向かって崖を呈している。Ⅱ地区は北側をⅡ－①地区、南側をⅡ－②地区とした。標高は、290～293m。Ⅱ－①地区は北西方向に傾斜しており、Ⅱ－②地区はほぼ平坦である。また、Ⅱ地区の北西側約500mのところに茶臼山があり、山頂付近には、中世の山城である熊山城跡がある。遺構面は黄褐色土で、部分的に火山からの噴出物と思われる黒褐色土の堆積が見られる。またⅡ－②地区中央より西側の遺構面を中心に20～40cmの玄武岩の礫が露出している。また、Ⅱ地区は後世の削平を受けており、Ⅱ－①地区の南側及びⅡ－②地区の西では遺構が認められない。Ⅱ地区から発見された遺構は、中世の掘立柱建物跡と思われるもの3棟、土坑4基、埋葬遺構1基、柱穴約430個である。遺物については、石鏃や管玉など縄文時代のものを含むが、全体としてみれば、中世の土師器が大半を占める。以下に、Ⅱ地区の主要な遺構と遺物を紹介する。

（1）建物跡

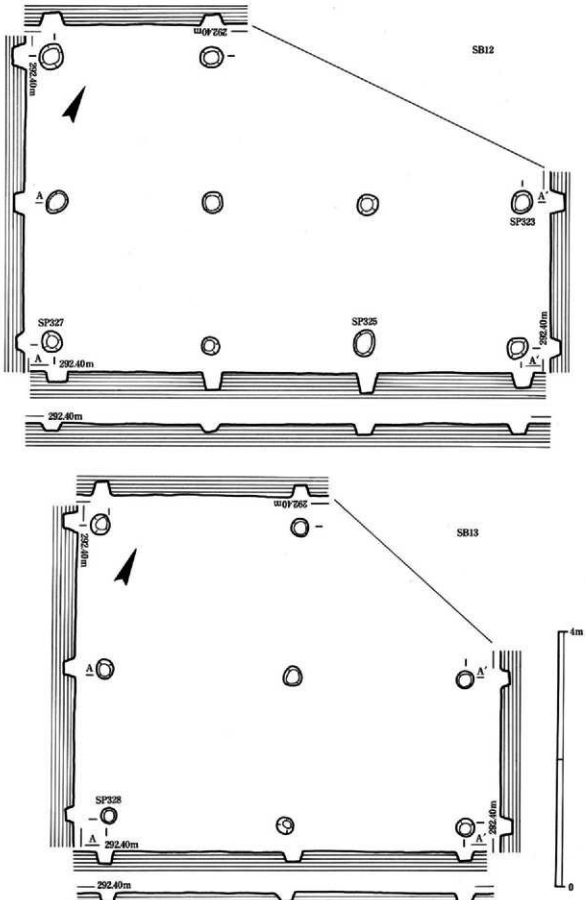
Ⅱ地区において掘立柱建物跡が3棟確認された。3棟とも棟の規模・方向から中世の掘立柱建物と考えられる。また、いずれもⅠ地区の建物より規模が大きい。

ＳＢ11　（第17図　図版12）

Ⅱ－②地区の東端の位置に建てられた2間×2間の総柱建物。棟方向はN32°W。桁行長4.7m、梁行長4.6mで、9本の柱で構成されている。柱穴は直径22～35cm、深さ8～20cmである。ＳＰ307から



第17図　SB11実測図



第18図　SB12・13実測図

土師器片が出土した。この建物は13～14世紀のものと推定される。

ＳＢ12・13　（第18図　図版12）

ＳＢ12は、Ⅱ－②地区中央部やや西寄りに位置する２間×３間の総柱建物で北側桁の柱穴２個が調査区外のため確認できなかった。棟方向はN64°Ｅ。桁行長7.2m、梁行長4.5mの規模をもつ。柱穴は直径25～38cm、深さ14～27cm。ＳＰ323・325・327から土師器片が出土した。中世に比定できる。この建物は南東側桁に庇をもつ建物の一部の可能性もある。

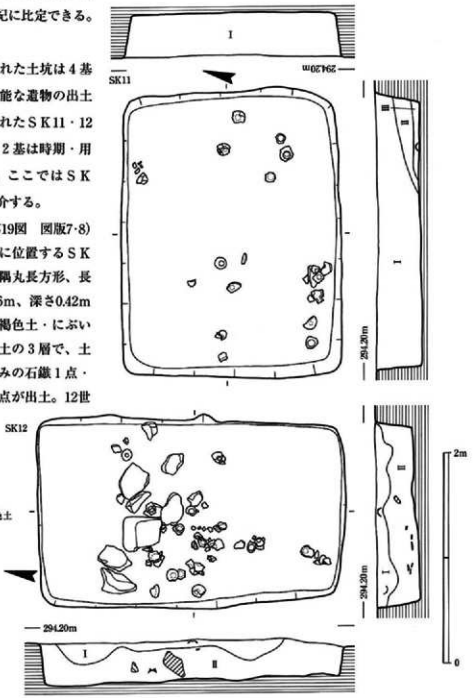
ＳＢ13はＳＢ12の西側に一部重なる形で検出された２間×２間の総柱建物である。北側の柱穴１個が調査区外のため確認できなかった。棟方向はN68°Ｅ。桁行長5.5m、梁行長4.6m。柱穴は直径22～28cm。ＳＰ328から土師器片が出土した。13～14世紀に比定できる。

（２）　土坑

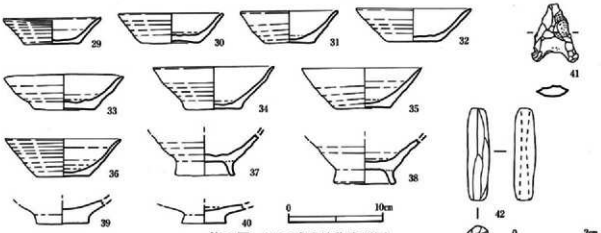
Ⅱ地区で確認された土坑は４基であるが、図化可能な遺物の出土は隣接して検出されたＳＫ11・12からのみで、他の２基は時期・用途は不明である。ここではＳＫ11・12について紹介する。

ＳＫ11・12　（第19図　図版7･8）

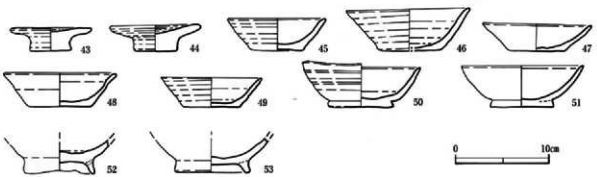
Ⅱ－②地区東側に位置するＳＫ11は平面形はほぼ隅丸長方形、長軸2.64m、短軸1.96m、深さ0.42mである。埋土は暗褐色土・にぶい黄褐色土・黒褐色土の３層で、土師器12点と流れ込みの石鏃１点・縄文時代の管玉１点が出土。12世



第19図　SK11・12実測図



第20図　SK11出土遺物実測図

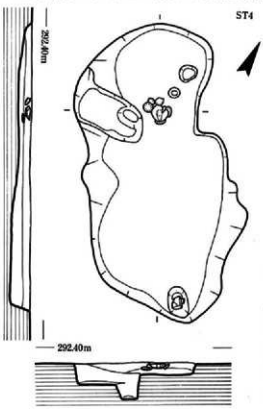


第21図　SK12出土遺物実測図

紀前半の祭祀跡と考えられる。

ＳＫ12はＳＫ11に隣接し、長軸2.85m、短軸1.70m、深さ0.40mである。埋土は暗褐色土・にぶい黄褐色土の２層で、土師器11点と土師器の破片多数が出土した。12世紀の祭祀跡と考えられる。

第20図にはＳＫ11の出土遺物を掲載した。29～36は土師器坏、39・40は土師器台付き坏、37・38は土師器椀である。41は石鏃で、姫島産黒曜石を石材とする。42は碧玉製の管玉である。



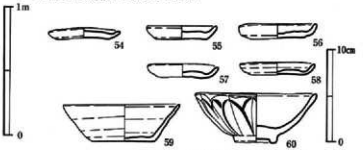
第22図　ST4実測図

第21図ではＳＫ12の出土遺物を紹介する。43・44は土師器高台付き皿、45～49は土師器坏、50～53は土師器椀で、52・53は高台が二重貼りである。

（３）　埋葬遺構

Ⅱ地区では中世の墓１基（ＳＴ４）が発見された。

ＳＴ４（第22図　図版10）は長軸2.10m、短軸1.08m、深さ0.16mの不整長円形の墓。かなり削平を受けており、木棺墓か土坑墓かは不明である。墓からは土師器皿５点（第23図54～58）、土師器坏１点（第23図59）、輸入青磁蓮弁文椀１点（第23図60）が出土。13世紀の遺構と考えられる。



第23図　ST4出土遺物実測図

5　Ⅲ地区の遺構と遺物

Ⅲ地区は岡田・江良遺跡で最も標高の高いところに位置し、権現山の西麓にある。また、本地区は茶臼山山頂付近にある中世の山城である熊山城跡を北西方向に望める場所でもある。標高は292～298mで北東側で高く南西に向かって低くなる。Ⅲ地区中央部をⅢ－①地区、東側の飛び地をⅢ－②地区とした。Ⅲ－①地区の遺構面は赤褐色土で、後世の削平を受けており部分的に遺構の密度が希薄である。Ⅲ－②地区の遺構面は黄褐色土で、遺構の密度は希薄で遺物の出土はない。Ⅲ地区から発見された遺構は、武士の館の堀と思われるもの１条、土坑５基、柱穴約410個である。遺物については、輸入白磁碗（12世紀）が１個出土した他、中世の瓦質土器・土師器・石製品等が多量に出土した。なお、Ⅲ－①地区の西端に隣接する地点から南方向約150mの範囲については、５カ所でトレンチ調査を実施し、柱穴22個を確認した。

以下、Ⅲ地区の主要な遺構と遺物を紹介する。

（１）　土坑

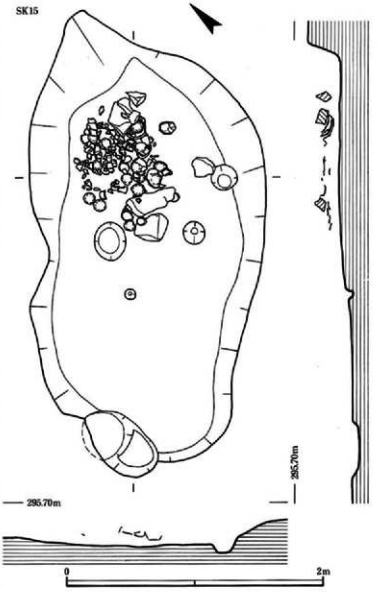
Ⅲ地区で確認された土坑は５基である。ＳＫ15・ＳＫ18・ＳＫ19については出土遺物より14世紀のものと考えられる。その他の土坑については、時期を決定できる遺物は出土していない。

ＳＫ15　（第24図　図版８）

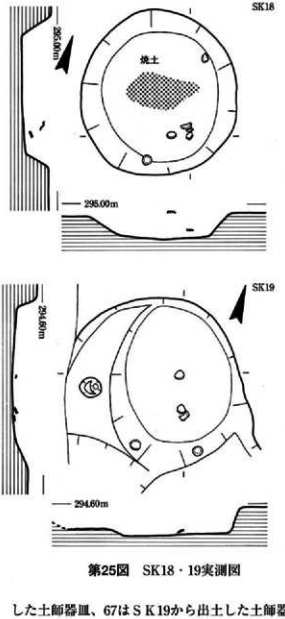
Ⅲ－①地区の中央部やや西寄りに位置し、堀の中央部の北側に隣接する。N55°Eに主軸をとる長軸3.39m、短軸1.70m、深さ0.26mの不整長円形の土坑である。後世の削平を受けており北東から南西に向かって浅くなり、底部中央部には４個の小坑が掘り込まれる。また、土坑南東側は柱穴により一部切られる。埋土は褐色土の単層であり土坑の北東側で多量の土師器（第26図）と自然石が出土した。土器は重なった状態の出土も見られ、祭祀に伴う遺構の可能性もある。14世紀の遺構と考えられる。

ＳＫ18　（第25図　図版９）

Ⅲ－①地区の南側に位置し、長径1.30m、短径1.11m、深さ0.23mのほぼ円形



第24図　SK15実測図



第25図　SK18・19実測図

の土坑である。埋土は褐色土の単層であり、底部中央部には焼土が見られる。土師器皿１点（第26図66）と土師器片が出土した。14世紀の遺構と考えられる。

ＳＫ19　（第25図　図版９）

Ⅲ－①地区の南側に位置し、ＳＫ18の西約５ｍのところにあり、南西側は一部調査区によって切られている。長軸1.35ｍ、短軸1.36ｍのほぼ円形を呈する土坑である。西半分に比し、東半分はさらに掘り窪められている。深さは0.21ｍである。埋土は褐色土の単層であり、土師器皿１点（第26図67）と土師器片が出土した。14世紀の遺構と考えられる。

土坑出土の遺物で図化可能な遺物を第26図に掲載した。61～65・68～79はＳＫ15出土の遺物である。

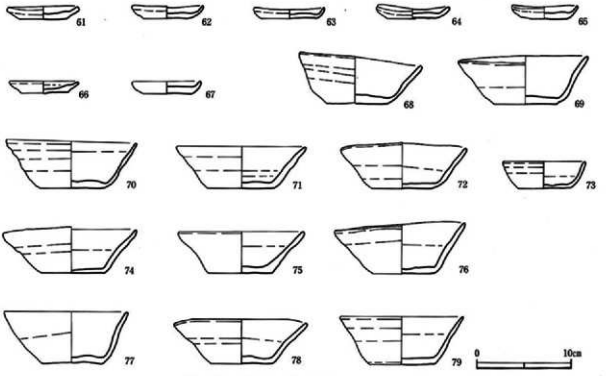
61～65は土師器皿であり、内外面ともに回転ナデ調整、底部には回転糸切りの痕跡がある。土師器皿は、口径7.0～7.7㎝、底径4.8～5.6㎝、器高1.2～1.5㎝である。68～79は土師器坏であり、内外ともに回転ナデ調整、底部は回転糸切りの痕跡を残す。坏は口径8.7～14.1㎝、底径5.5～6.5㎝、器高2.9～5.5㎝である。66はＳＫ18から出土した土師器皿、67はＳＫ19から出土した土師器皿である。いずれの皿も、内外ともに回転ナデ調整、底部に回転糸切りの痕跡を残す。

（２）　遺構に伴わない遺物

第27図80・81はⅢ－①地区における遺物包含層中の遺物である。80は打製石鏃である。姫島産の黒曜石を石材として用いている。81は輸入白磁碗（12世紀）であり、完形で出土した。口径17.0㎝、器高は6.4㎝で、灰白色の胎土に灰白色の釉薬を施釉。

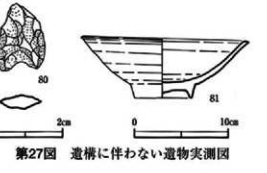
（３）　堀　（第28・29・31図　図版３・４・５・６・７）

Ⅲ－①地区において武士の館の周囲を巡らしたと考えられる堀を発見した。堀は本遺跡のある丘陵上の最も高位に位置している。堀の東側は権現山がすぐ背後まで迫り、北側は茶臼山などの山丘が連なる。南には蔵目喜川、西には惣津川が堀を囲むように流れている。このように堀発見の場所は、武士の居館の立地条件としては恵まれた地形にある。また、堀の北東方約700ｍの茶臼山の頂上付近には中世の山城である熊山城跡があり、当地が戦略上重要な場所であったことも推察できる。また、堀の南東側に隣接している吉部八幡宮の存在も興味ある事実である。



第26図　SK15・18・19出土遺物実測図

このたび検出できた堀は長方形の館の最外を巡ったと考えられるが、その大半が調査区によって切られ、南側（南堀）67.0m、東側（東堀）3.5m、西側（西堀）23.5m。また、館の規模を確認するために全容を確認できた南堀の反対側の一辺（北堀）について重機によるトレンチ調査を実施した。北堀については発見できなかったが、西側の堀の延長上約37mの地点（第28図JJ′）において、大型溝状遺構を検出した。これは、西堀の一部と推定する。Ⅲ－①地区は後世の削平をかなり受けているためか、館（郭）を取り囲んで築かれたはずの土塁は確認できなかった。



第27図　遺構に伴わない遺物実測図

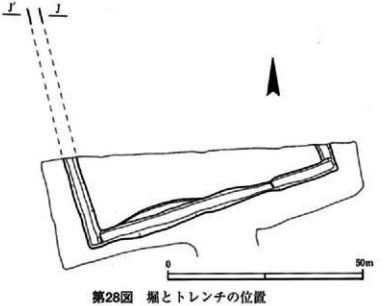
以上の事実から館の規模及び形態について推定すると、次のようになる。

館：（堀の最外）東西67m、
　　南北60.5m以上の長方形、
　　主軸はN17°W

検出した堀については、次の通りである。

堀：堀底巾2.0～3.8m、
　　上端巾4.6～7.5m、
　　深さ0.8m～2.4m

堀底の標高は全体的には東側で高く、



第28図　堀とトレンチの位置

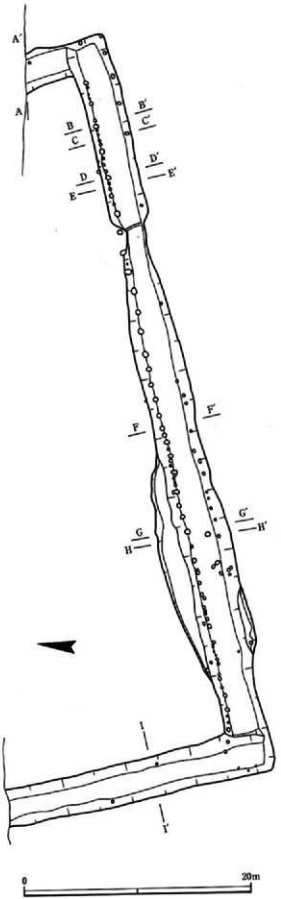
西側で低く、北西側のトレンチ部分ではやや高くなっている。標高は297.8～292.1mで南堀は西に向かって徐々に低くなる。また、東堀と南堀の合流点及び南堀と西堀の合流点では、それぞれ0.40～0.45cm段差があり低位方向に向かって急激に落ち込む。このような形態から、この堀は空堀と考えられる。

堀の底部では、多数の柱穴の列（第29・31図　図版５・６）が発見された。柱穴は122個あり、直径は30～80cm、深さ45～80cmの大型のものから直径15～20cm、深さ10～45cmの小型のものに大別できる。

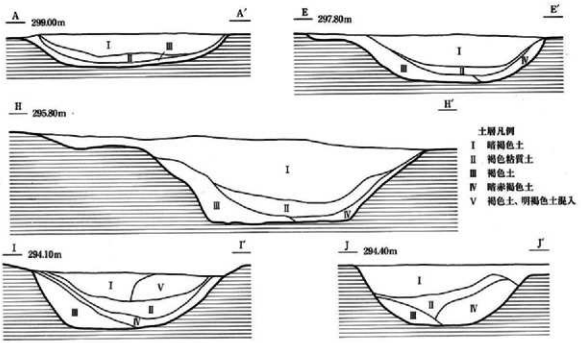
柱穴には堀の内側の下場上に掘られたもの、底面上に掘られたもの、及び堀の外側内壁に掘られたものがある。堀内側の柱穴列は整然とほぼ一列に並ぶが、場所によって、大型柱穴と大型柱穴の間に３～４個の小柱穴を配した部分（南堀東側）、大型柱穴がほぼ等間隔で並ぶ部分（南堀中央部）、および前者より間隔は広く大小柱穴がまばらに掘られた部分（南堀西側）がある（第31図）。東堀南端から南堀東端にかけて、約1.5m間隔で３個、続いて2.5m間隔で３個の柱穴が並んでいる。特徴的な柱穴の配置である。

柱穴列を含めた堀の復元については、他の遺跡における類似例が少なく非常に困難である。この館が有力武士の生活の場であるだけでなく、地形的に開けた南方向を中心にした防御機能を備えたものであったと考えた場合、南堀に顕著に見られる柱穴列は敵の進路を阻むための柵または逆茂木の跡である可能性がある。また南堀中央部西よりの堀底面には２個の大型の柱穴があり（第31図GG´付近）、その場所に館正面の門と橋があったのではないかと考えられる。また、同地点の堀に接した北側のテラス状の平坦面は、前述関連の遺構とも考えられる。堀のより確かな復元については、今後の調査に期待する。

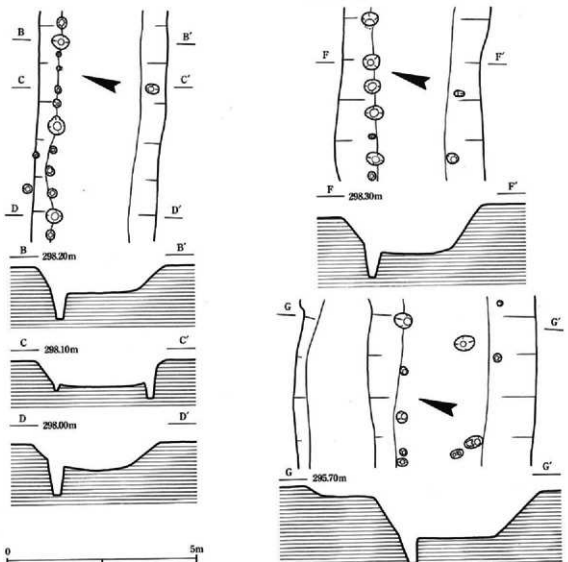
堀の埋土は、土層観察により４層（ＨＨ´地点は５層）と確認され（第30図）、埋土中位より16世紀の瓦質土器12点（足鍋・茶釜等）及びその小片多



第29図　堀実測図



第30図　堀断面図①

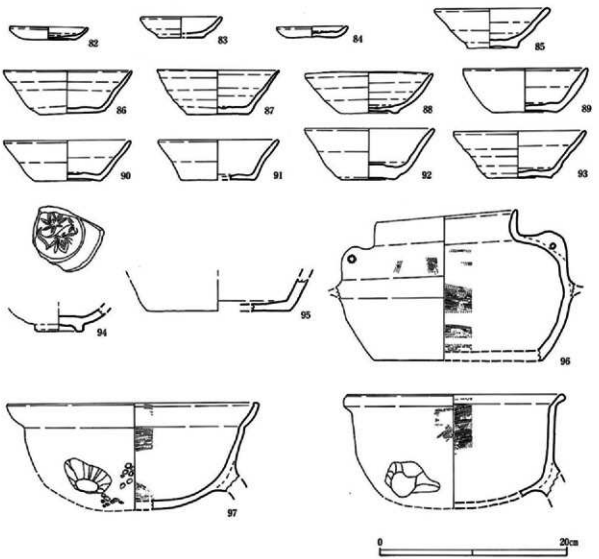


第31図　堀断面図②

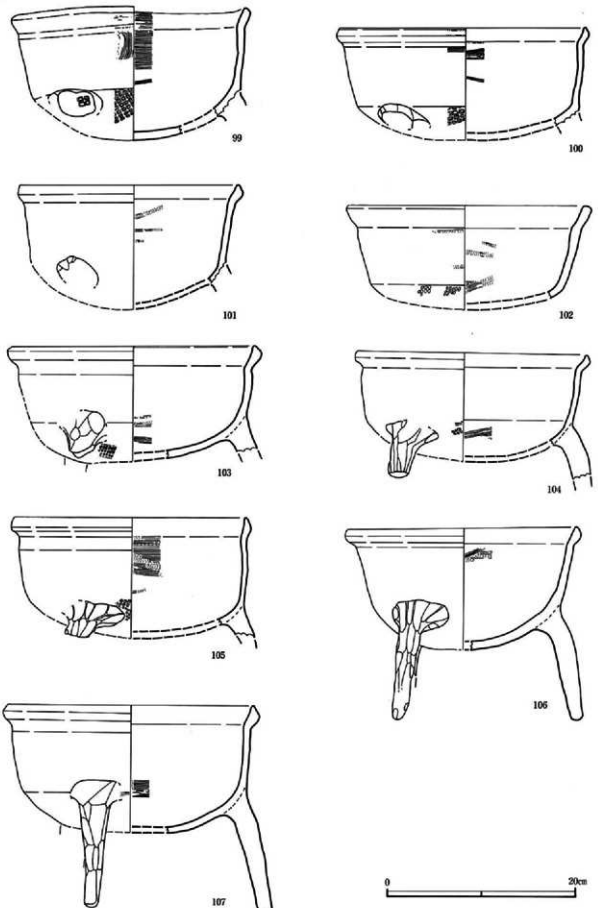
数・石製品（石臼4点・石鍋1点・五輪塔の火輪3点）・青磁碗の底部1点が出土した。埋土中下位より14世紀中頃～14世紀末の土師器12点が出土した。遺物の大半は南堀内から出土した。

遺物の出土状況から、この堀が14世紀中頃～16世紀という長期にわたってこの地に存在したことは理解できるが、16世紀にこの館が機能していたかどうかは不明である。

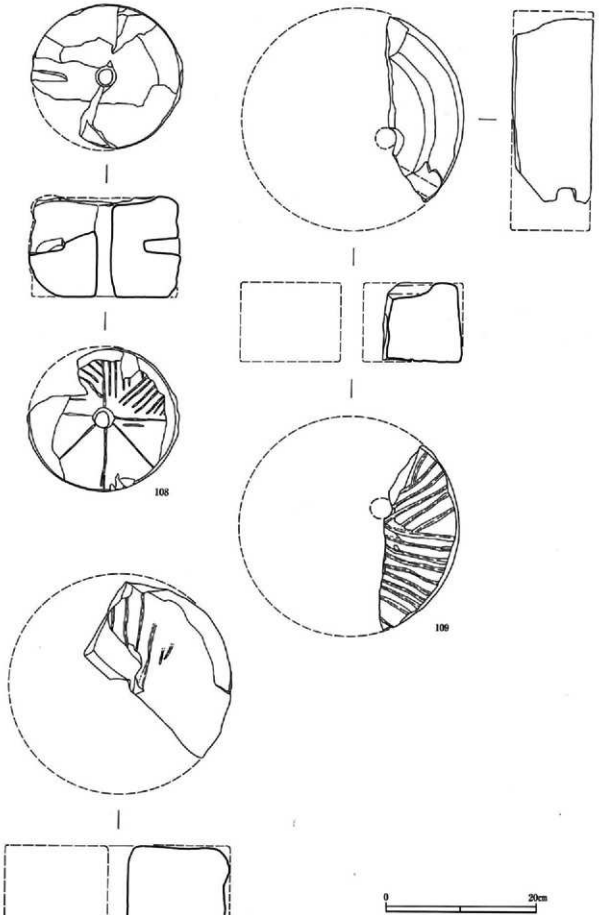
第32図～第35図は堀出土の遺物である。82～84は土師器皿である。いずれも内外面ともに回転ナデ、底部に回転糸切りの痕跡を残す。85～93は土師器坏。口径は11.9～13.9cm、底径5.3～6.9cm、器高4.2～5.4cm。内外とも回転ナデ調整、底部に回転糸切りの痕跡を残す。94は青磁碗の底部である。灰白色の胎土に緑灰色の釉薬を施釉。見込みに印花文が見られる。95は滑石製の石鍋の底部である。96は瓦質土器茶釜である。鍔以下には煤が付着する。97～107は瓦質土器鍋である。102は脚をもたないと考えられるが、その他の鍋は足鍋である。97・99・100・102・103・104・105は底部外面に格子状叩き目が残る。98・101は内外面ともにハケによって調整するが、106・107は内面にハケによる調整の痕跡が残る。108～111は石臼であり、108～110は茶臼の可能性がある。いずれの石臼も火砕層岩を石材としている。112～114は五輪塔の火輪である。112・114は玄武岩、113は火砕層岩を石材として用いている。



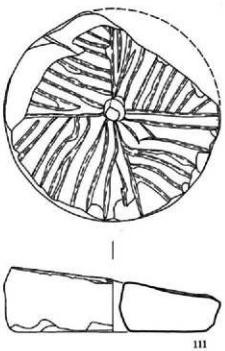
第32図　堀出土遺物実測図①



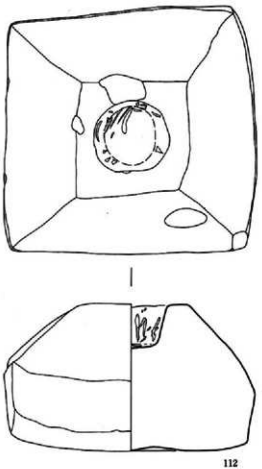
第33図　堀出土遺物実測図②



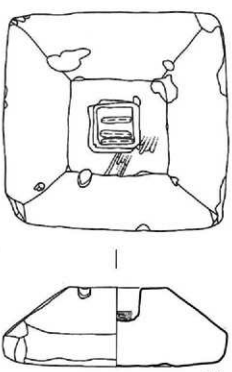
第34図　堀出土遺物実測図③



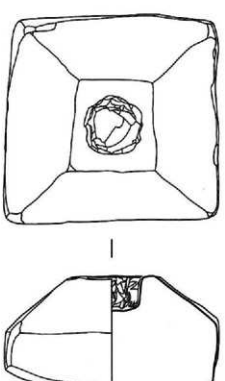
111



112



113



114

第35図　堀出土遺物実測図④

6 まとめ

岡田・江良遺跡は阿武郡むつみ村大字吉部上に所在する中世集落跡である。発掘調査の結果、13世紀から16世紀にかけて集落が存在したことが明らかになった。集落を構成する要素としては、掘立柱建物跡・土坑・墓・柱穴があり、それらを見渡せる場所で発見された有力武士の館の堀がある。集落の成立時期については、吉部八幡宮が建久年間（12世紀末）に岡田の地に遷座したと伝えられることと一致する。しかし館の成立は堀からの出土遺物から14世紀と考えられ、少なくとも16世紀までは存在したと考えられるが、16世紀の時点で館が機能していたかは不明である。したがって、本遺跡の現在の景観（館を中心とした集落）を形づくった時期は14世紀以降と考える。

第36図を参照すれば、館の地形的な立地条件がよく理解できる。館の東から北側は山丘で囲まれ、西側と南側を川が流れる。また、川と館のある丘陵の間は急崖を呈している。また、茶臼山には熊山城跡・権現山山頂には牟礼社、そして、館の南側に隣接して吉部八幡宮がある。つまり遺跡一帯は、館の守りを固めながらも、平時の居館に対する戦時の詰めの山城の二つがセットになる根小屋式城郭を呈していたと思われる。また、現在、堀周辺は「土井」と呼ばれ、この地の館の存在を連想させる。また検出された堀内で数多くの柱穴が発見され、その大半が南堀内に並んだ。このような柱穴列の類例はなく、堀の復元は困難であるが、ほとんどの柱穴は館の守りに関連した施設に係わるものと推定した。なお、柱穴列が南側で顕著であったことから、館の防御は、南側を正面としたと思われる。

『地下上申』には「江良丹後守殿御抱城の由申伝候」と記され、『風土注進案』には「大内家の御代江良弾正が支配したので、地名を江良と名付けた。」としている。しかし、弾正忠とも称された陶氏の家人であった江良賢宜（生没年不詳）は鹿野に居住した可能性もあり、『寺社由来』の龍雲寺（鹿野町）の項には、「当寺は江良氏の居所であった。」と記されている。

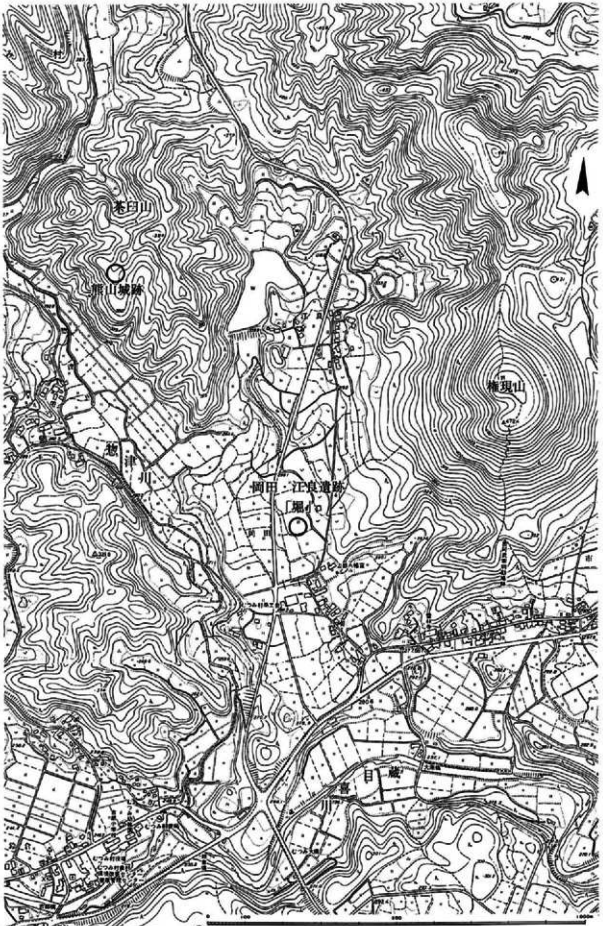
『風土注進案』の古城のところには、「里俗茶臼山という。時代不詳候へとも里説に遠藤（仙道）上総守居城の由、高山にてハ無之候へとも都ニ山の様子、上にも平地有之、尚先年此山上へ秋葉権現を勧請任、社を建候、地をならし候節短刀其外兵具の類、亦は陶器の割など掘出し候由申事ニ御座候右の秋葉社は淫祠なれば解払被抑付候事」とある。また『牟礼山権現由来書』には「上総守居城屋敷之跡は今は畠と成り、上総土井と申候、空堀の跡、北堀と申畠に今はなれり」と記されている。いま、遠藤か仙道かはわからないが、上総守という人物がこの地に城と館を築いたと考えることもできる。「北堀と申畠」が今回の調査で発見できなっかった北堀の存在を意味するのか、熊山城と館を築いたのは誰なのかなどについての追究は、今後の調査に期待する。この地域が吉見氏の領になったのが16世紀末とされ、堀の衰退時期と重なる。

参考文献　むつみ村・むつみ村教育委員会　『むつみ村史』　1985年

野上　毅　『日本の歴史5.中世Ⅱ』　1989年

菅　英志　『日本城郭大系 第14巻』　1980年

角川春樹　『山口県姓氏歴史人物大事典・山口県』　1991年



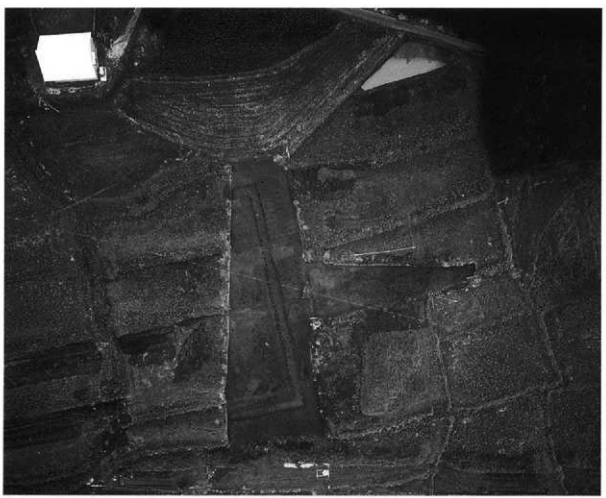
第36図　岡田・江良遺跡周辺地形図

図版1

岡田・江良遺跡遠景（南から）

第Ⅰ地区全景（南から）

第Ⅱ地区全景（南から）



第Ⅲ地区全景（西から）

図版 3

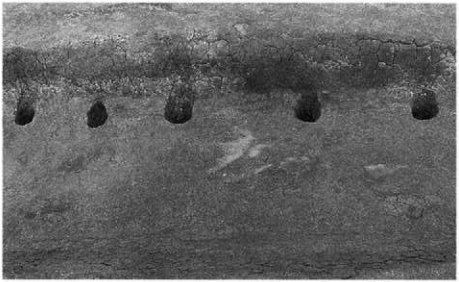
第Ⅲ地区堀全景（東から）

第Ⅲ地区堀と権現山を望む（西から）

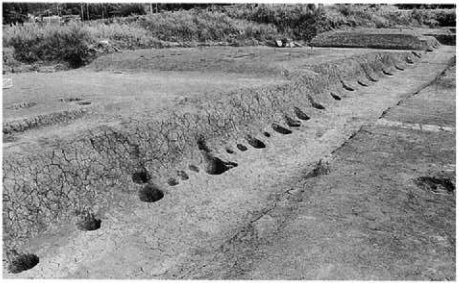
堀完掘（南東から）

堀完掘（西から）

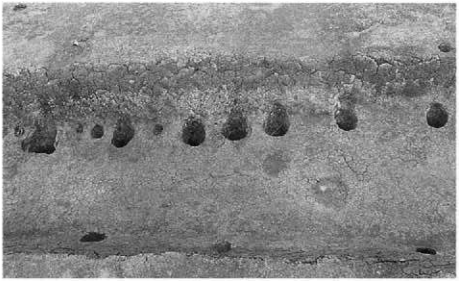
図版 5



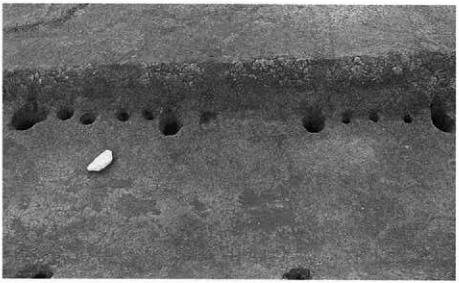
堀中央部柱穴列（南東から）



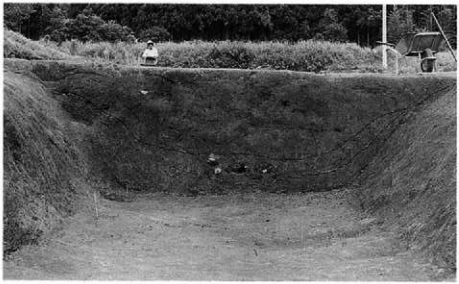
堀の柱穴列（南西から）



堀西側柱穴列（南東から）

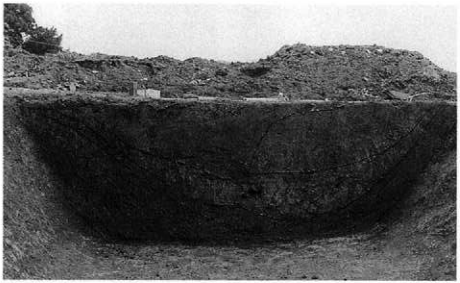


堀北側柱穴列（南東から）

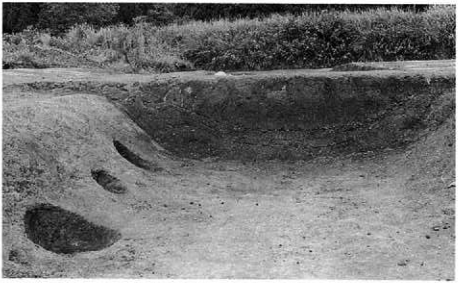


堀土層断面H（南西から）

堀土層断面A（南から）



堀土層断面I（北から）



堀土層断面E（南西から）

図版6

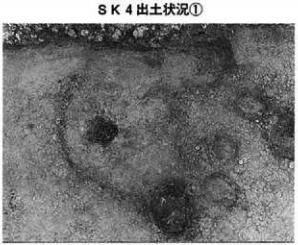
図版７

堀土層断面Ｊ（トレンチ部分）

ＳＫ２完掘

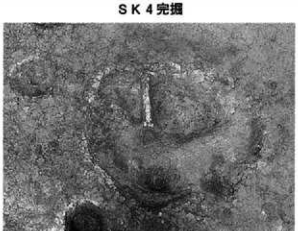
ＳＫ４出土状況①

ＳＫ４出土状況②



ＳＫ４完掘

ＳＫ５出土状況



ＳＫ５完掘

ＳＫ11出土状況①

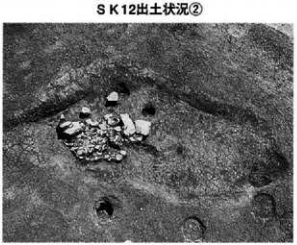
ＳＫ11出土状況②

ＳＫ11出土状況③

ＳＫ12出土状況①

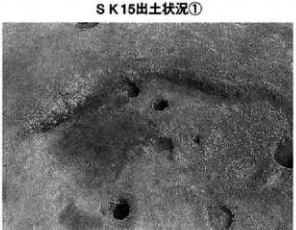
ＳＫ12出土状況②

ＳＫ11・12完掘（右ＳＫ11・左ＳＫ12）



ＳＫ15出土状況①

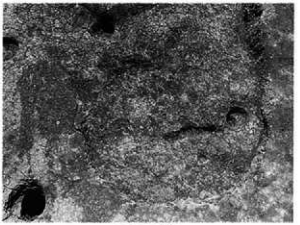
ＳＫ15出土状況②



ＳＫ15完掘

図版 9

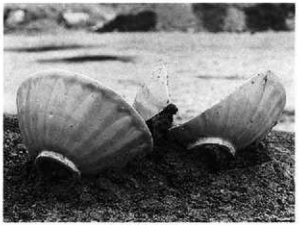
ＳＫ18完掘



ＳＫ19完掘

ＳＴ１完掘

ＳＴ２出土状況①



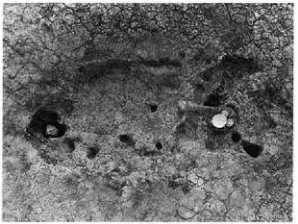
ＳＴ２出土状況②

ＳＴ２完掘

ＳＴ３出土状況①

ＳＴ３出土状況②

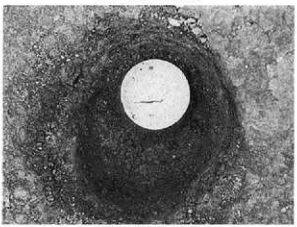
ＳＴ３完掘



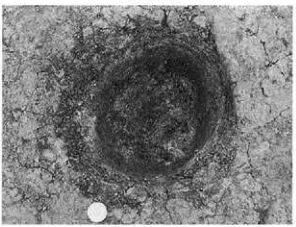
ＳＴ４出土状況①

ＳＴ４出土状況②

ＳＴ４完掘

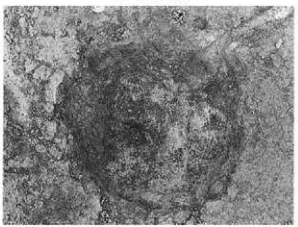


ＳＰ216出土状況



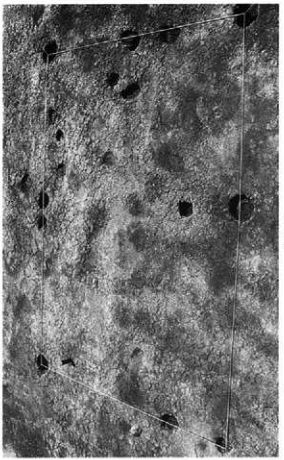
ＳＰ216完掘

ＳＰ237出土状況



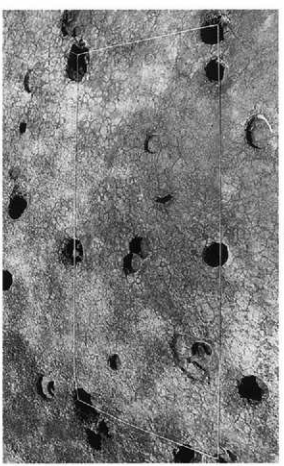
ＳＰ237完掘

図版11



SB2

SB3



SB4

SB5

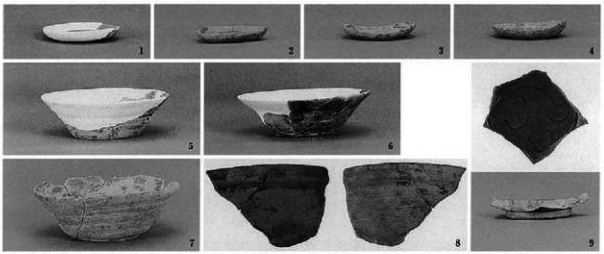
SB11

SB6

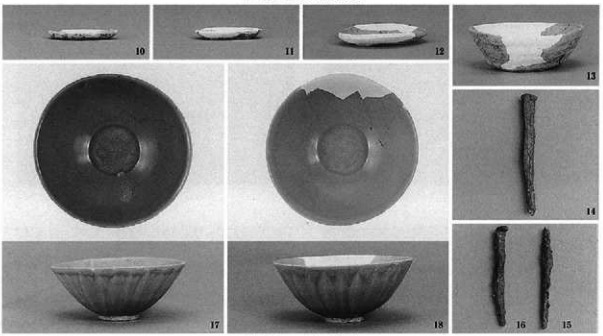
SB12・13（後方SB12・手前SB13）

SB7

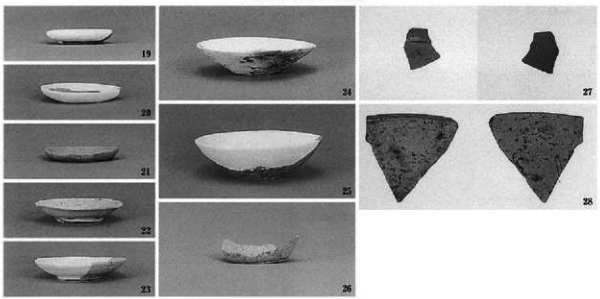
図版13



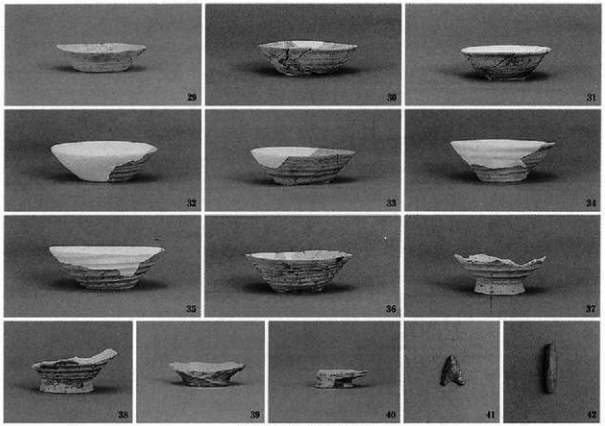
Ⅰ地区ＳＫ出土遺物



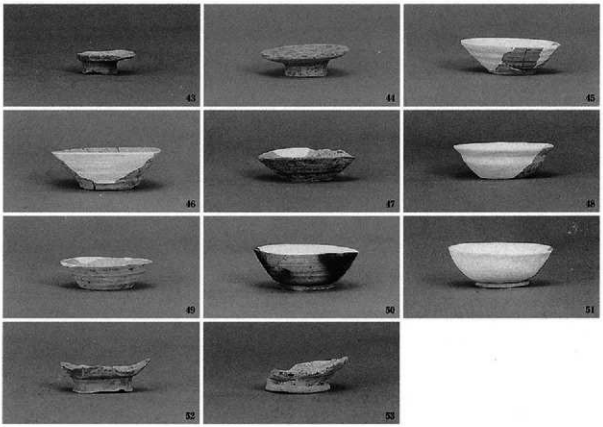
Ⅰ地区ＳＴ出土遺物



Ⅰ地区ＳＰ出土遺物

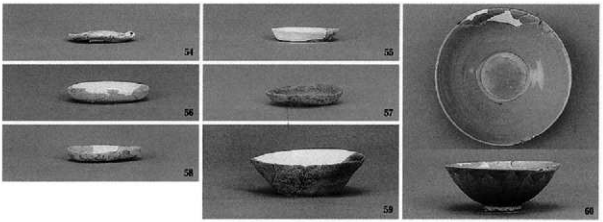


Ⅱ地区ＳＫ11出土遺物

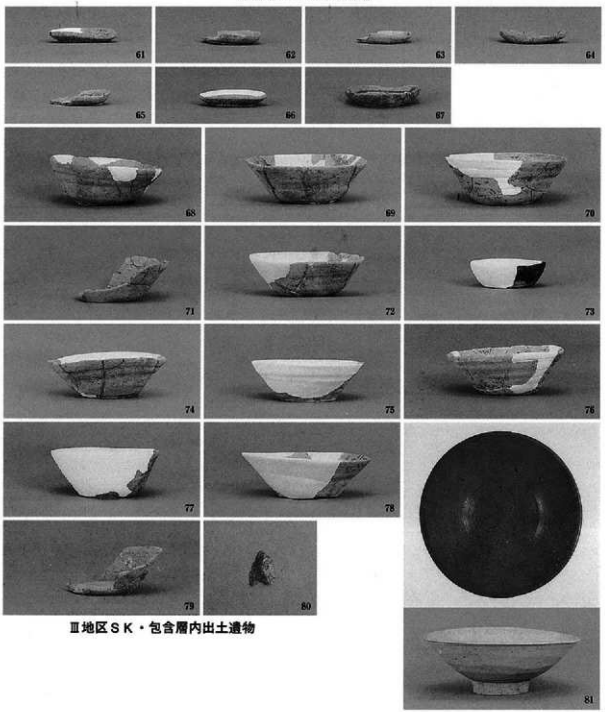


Ⅱ地区ＳＫ12出土遺物

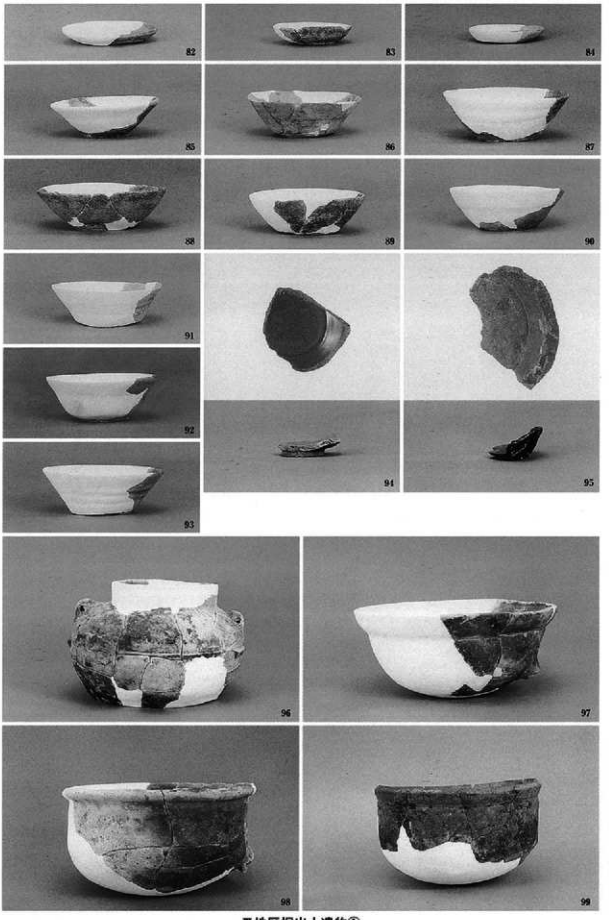
図版15



Ⅱ地区ＳＴ４出土遺物

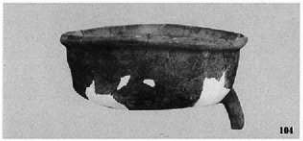


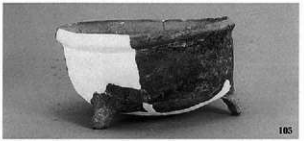
Ⅲ地区ＳＫ・包含層内出土遺物

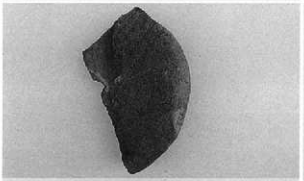


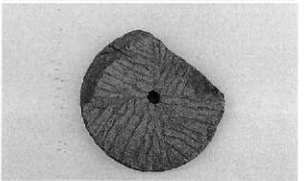
Ⅱ地区堀出土遺物①

図版17

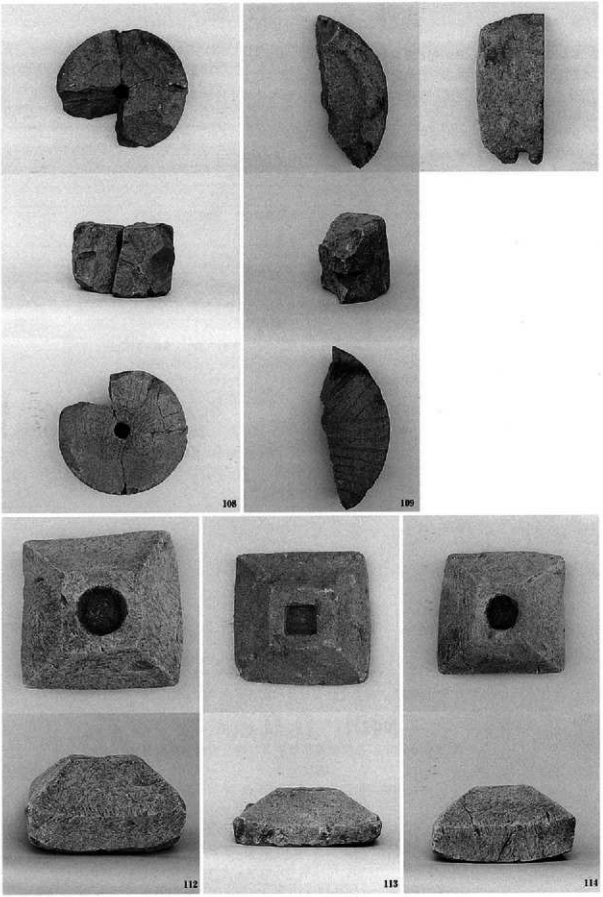








Ⅲ地区堀出土遺物②



Ⅲ地区堀出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	おかだ・えらいせき
書名	岡田・江良遺跡
副書名	平成9年度山口北部農地整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第5集
編集著者名	西田 宏　相山茂樹
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3－22 TEL0839-23-1060
発行年月日	西暦1998年3月20日　（平成9年3月20日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
岡田（おかだ）・江良（えら） 遺跡（いせき）	阿武郡（あぶぐん）むつみ村（そん） 大字吉部上（おおあざきべかみ）	35505		34°26′40″	131°35′31″	19970506 ～ 19970930	6,000	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡田・江良 遺跡	集落跡	中世	堀　1条 掘立柱建物跡 13棟 土坑　53基 柱穴　2562個	青磁　白磁 土師器　瓦質土器 スラグ	武士の館の掘跡を 検出

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第5集

岡田・江良遺跡

— 平成9年度山口北部農地整備事業に伴う発掘調査報告 —

1998

編集　財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町3—22）

発行　財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町3—22）

印刷　森重印刷株式会社
（山口市湯田温泉2丁目）